社会変動の理論

富永健

社会変動の理論

——経済社会学的研究——

富永健一著

岩波書店

社会変動の理論

一九六五年一〇月三〇日　第一刷発行©
一九七九年一〇月二〇日　第一五刷発行

定価二四〇〇円

著　者　富永健一

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社　岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・精興社　製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

序

現代は社会変動にみちみちた時代である。戦後の二〇年間、われわれは、明治時代の第一世代の人びとが体験したであろう変動とほとんどまさるともおとらない、かずかずの変動に直面してきた。この経験を理論化したい——これが本書にこめられた私の念願である。

戦後これまでの二〇年間が急激な変動の時代であったことは、たとえば、都市や農村の姿のおどろくばかりの変貌、そこに働く人びとの価値観の信じられないほどの変化、社会科学上および哲学上の著作や論文にあらわれた中心論点のめまぐるしい推移、などを一つ一つかぞえあげていくだけで、だれの目にも明瞭である。二〇年前、あるいは一五年前、こんにちの日本の社会を明確なイメージとして思い浮かべることに成功していた書物があったとは、私には思われない。変化はそれほど急激だったのであり、社会科学者が過去の日本にとらわれているあいだに、現実のほうが先行——プラスの面とマイナスの面とをともにふくめて——していたともいえるのである。

人は、過去を整序し、要因を弁別し、それによって未来を客観的に予測したいと願う知的願望をもっており、他方また、現代社会の悪や不幸が未来において除去されることを要求する道徳的願望をもっている。前者は認識であり後者は価値である。あるいは、前者は科学であり後者はヴィジョンである。

社会変動論と名付けることのできるようないくつかのこころみは、この二つの種類の願望をみたそうとする人間の努力とともに生まれた。来年の景気予測とか人口予測とかいう種類の問題ならば、ヴィジョンなどという大げさなものはいらない。だが「社会変動」に関する一般理論というような性質の課題を設定するとなると、およそなんらかの

意味で有意義とみなしうるような定式化への到達は、科学とヴィジョンとの適正な総合の上に立ってのみ、可能である。しかしながら、他方、このことは明らかに「科学としての」社会変動論の決定的な弱点でもある。ヴィジョンというのは「幻」という意味をあわせもっている。そしてヴィジョンはじっさいいつも多少とも「幻」なのである。多くの学者が、これまでにユートピア的「幻」をえがき、また絶望的な「幻」をえがいた。けれども、人間にどこまでほんとうに歴史の「先が読める」かは、疑問であるようにも思われる。二〇年前の日本の社会科学者ばかりではない。一九世紀ヨーロッパの学者たち、たとえばスミスにせよ、マルサスにせよ、サン－シモンにせよ、コントにせよ、またマルクスでさえ、五〇年先が読めていたとは思われない――かれらは読めていると思っていたかもしれないけれども。

こういうことを考えてみると、「社会変動の理論」というようなこころみが、ほんらい成功に達しうる見込みのある企てであるかどうかは、すこぶる疑わしいといわねばならない。しかも社会科学の各分野で、個別領域ごとの実証研究が主流を占めているときに、この種の「思弁的」な企てをあえてするのは、「科学」としてはとんだ時代錯誤であるといわれるかもしれない。

しかしながら、「思弁的」ということをわるい意味に使い、ファースト・ハンドのデータ処理のみを真の研究とみなす戦後のわが国社会学の一般的な動向には、多少のいきすぎもあったように、私には思われる。思索というものを排除しておいておよそ学問が成立するであろうか。問題は、「思弁」を排除することにあるのではなくて、「ものの考え方」のルールを確立し、推論を確実なものたらしめるということにこそ、あるのではなかろうか。

社会変動というような大きな問題設定に直面したとき、「ものの考え方」の基本が確立していなければ、個々の事実についての断片的な知識の集積がたとえいくら豊富にあったとしても、われわれは、理論的に有意味なことを何もい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

えないであろう。私は本書のなかで、私自身の「ものの考え方」のルールを確立し、それを提示することをめざした。そのルールは、私が「社会学的機能主義」と呼ぶものにほかならない。「社会学的機能主義」は、しばしば、変動の問題をあつかうのに無力であると論難されてきた。私はそれを謬見と考えるがゆえに、「社会学的機能主義」の可能性をつきつめることによって、変動の問題をこの方法論であつかうことをめざしたのである。

基本的な「ものの考え方」が確立しており、かつそれが有用な方法論であるかぎり、それをよりどころにして経験的事実を概念化し、経験の断片性の空隙を論理的推論で埋めて、首尾一貫した説明の体系を構成することは可能なはずである。これこそが、本書のめざすものである。とはいえ、この過程は、数学や論理学のような純粋推理とはその性質を異にするから、それの正しさを一挙に「証明」する方法をもっていない。経験は常に不十分であり、推理は常に不確実である。この不十分で不確実な思考の過程を、すこしでも十分かつ確実なものに近づけていこうとする努力が、一般に「洞察」とか「解明」とか呼ばれているものにほかならない。人間はだれでも(しろうとでも)そのような努力を多かれ少なかれ日常やっているのであるし、また専門家でも完全に「正しい」洞察に達しているわけではないのだから、この道に関しては、専門家だからというので胸を張っていばってもよいということにはならないのである。思えばはがゆいことである。

だが、「基礎理論」とは、もともとそういうものだと私は思う。基礎理論家は、何かを達成したというよろこびを味わう特権をもっていない。かれのやったことはいつも不完全であり、それどころか、まったく無意味であることをあとから思い知らされるかもしれない。私は基礎理論を勉強し、基礎理論家として本書を書いた。ここにのべられていることは、現段階での私のすべてとはいわないまでも、半ば以上である。にもかかわらず、私はこれで社会変動という問題がわかったと思っているわけではない。もちろん本書を公刊することに私は抱負をもっている。社会変動の理

論を正面から扱った著作は、日本では、故小松堅太郎教授のもの(『社会変動論』有斐閣、一九五三)以来一二年間、出版されたことがない。アメリカではヘーゲン教授の著作(HAGEN, E. E., *On the Theory of Social Change*, Homewood, Ill.: Dorsey, 1962)とムーア教授のテキスト版の小冊子(MOORE, W. E., *Social Change*, New Jersey: Prentice-Hall, 1963)がそれぞれ最近の業績であって、とくに後者はすぐれているが、私の貢献がそのゆえに無意味になるというほどのものではないように思われる。ヨーロッパには最近この題名の書物は見あたらない。私の知っている範囲では、ドイツのダーレンドルフ教授(富永健一訳『産業社会における階級および階級闘争』ダイヤモンド社、一九六四)がこの問題を体系的に考えようとしており、私はかれの著作から多くの示唆を得たけれども、なおかつかれに完全に同意することができなかった。こうして、私が本書にこめた抱負があるということは、まちがいない。しかし抱負は不安と抱き合わせにしか存在しない。抱負が大きければ不安もまたそれだけ大きいことになるのである。

私が自分の単独の著作として一冊の書物を公刊するのは、これがはじめてである。だから、基礎理論研究者としての私の仕事は、まだはじまったばかりである。しかし、私がひそかに考えている基礎理論の骨組のようなものがある。それをひととおり書いておこう。

私の考えている基礎理論というのは、行動理論、社会構造論、および社会変動論から成っている。まず行動理論は、基礎理論のそのまた基礎づけ、いわば基礎理論の方法的基礎とでもいうべきものである。そういうものが必要な理由については本書のなかでもふれてある。つぎに社会構造論と社会変動論という一組の基礎理論は、一九世紀いらいの静学・動学二分法的思考を継承したもので、社会静学および社会動学というあの伝統的な名称をこれにあててもさしつかえない。現実には、社会の常態は変動だけだということもできるが、しかし変動論は構造論の把握なしにはほん

らい不可能である。だから、行動理論が社会構造論を基礎づけ、社会構造論が社会変動論を基礎づける、といってよかろう。

これらのうち、行動理論については、私はこれまでにいくつかの独立論文を書いてきた。それらを書きあらためて体系化する作業が、いま進行中である。社会変動論は、ここに不十分ながら、私の最初の著作としていちおう公刊のはこびになった。社会構造論は、書物としては独立せず、この両方にいわば分属している。

社会変動論のほかに、私は、インダストリアリズム思想史というようなものを準備しており、これも部分的にはできあがっている(「産業主義と人間社会」『今日の社会心理学』第一巻、培風館、一九六五)。私の社会変動論における独立変数は「産業化」であるから、産業革命期いらいの産業化問題の受けとめられ方の歴史をたどってみたいというのがその趣旨である。本書で学説史ないし思想史の部分をきわめて簡略にしたのは、この理由による。かくして、それほど遠くない将来に、行動理論、社会変動論、およびインダストリアリズム思想史という三つのものが出そろうことになるはずである。

基礎理論がこうしていちおう構築されたら、つぎにはそれをより現実的な次元で具体化する仕事がある。私はそれを、社会構造論に対応するものとしては比較制度論、社会変動論に対応するものとしては社会史、というふうに考えている。これらは、私にとってまだかなり遠い課題である。しかし、基礎理論が基礎理論として終わってしまうのでは得るところは少ないであろう。基礎理論は道具であり、道具は使われなければ意味がない。本書の内容があまりに一般的かつ抽象的でありすぎるという批判にたいしては、私は、一方で基礎理論の果たすべき「ものの考え方」の訓練という機能を強調したいと思うと同時に、他方で私の作業がこれだけで終わるのではないことを記しておきたいと思う。

行動理論、社会構造論、および社会変動論という基礎理論の骨組は、私の考える社会学の原理論的部分である。しかしながら、こんにち社会学の基礎理論としてどういうものを考えるかは人によってかなりちがっており、社会学基礎理論と呼ばれるものの実質的内容は必ずしも統一的な体系をもってはいないということを、率直にみとめるほうが実情にそくしていると私は思う。だから私は、統一的に理解されているとはいいがたい社会学の原理論的部分を、私の考える基礎理論の骨組によってことごとく統一して他をすべて排除してしまおうとか、あるいは逆に、私が異なった体系の調停役を買って出ようとかいう要求をもち出す意図を、もっているわけではない。私は私の道をつきつめてみる。他の人は他の道をつきつめていくであろう。ちがった考え方が競合しあうことは、それはそれでいいのではないか。

私は社会学のほかに、経済学と経営学を多少勉強してきた。もちろん学問分業のたてまえの浸透しているこんにち、私は経済学と社会学とが未分化であった時代の先例をもち出して、それらを一人で兼ねるというこころみをあえてしようと考えているわけではない。私が経済学を勉強したのは、それが直接間接に私の社会学理論を益すると思ったからである。だが結果として、私は、この両者のいわば中間的な地帯である経済社会学というものについて深く考えるようになった。

私は本書の副題に、「経済社会学的研究」というのをつけた。その意味は、まだそれほど厳密に考えられているとはいえない。ただ、本書であつかわれている素材が、経済社会学的研究は何ゆえに必要であるかを示すに適しているということは、いえるであろう。というのは、本書の中心的なアイディアを、私は変動における「趨勢的なもの」、すなわち、社会の「成長」または「発展」というところにもとめた。ここで「経済成長」なる概念が一役買うことにな

るのは見やすい道理である。かくして、経済と社会との関係という厄介な問題が登場する。マルクス主義社会科学は、この厄介な問題にたいして、可能な一つの解決策をもっている。本書の問題設定にさいして、このマルクス的思考が私にとっての問題の出発点を与えていることはたしかである。しかしながらこの問題について私はマルクス主義的把握の方法に同意することができなかった。私は歴史学派やデュルケム学派やマックス・ヴェーバーを遍歴し、なかんずくパーソンズ教授の中心的なアイディア（富永健一訳『経済と社会』二冊、岩波書店、一九五八―五九）にふれたことによって、経済を特殊、社会を一般というふうに考える思考法をえらぶにいたった。

経済社会学的研究としては、本書はあくまで特殊研究であって、経済社会学そのものの体系的な考察ではない（経済社会学の概説としては、最近アメリカとドイツで私と同世代に属する二人の著者が、それぞれ手ごろな著作を書いている。私としてはいささか先をこされた感じだが、この分野での研究がすこしずつでもかたちをなしてきつつあるのは、よろこばしい。SMELSER, N. J., *Sociology of Economic Life*, New Jersey : Prentice-Hall, 1963 ; FÜRSTENBERG, F., *Wirtschaftssoziologie*, Sammlung Göschen, 1964）。経済社会学的観点からの説明方式がじっさいに有用でありまた必要でもあることを示しうるためには、個々の経済過程――消費行動・投資行動・生産行動その他――についての経験的分析の積みかさねによる実績が、もっと必要である。これらのこともまた、私にとってのこれからの課題である。

他方、経営学は、本書が経営の研究でなく国民社会の研究であるゆえに、直接にはここでの問題として登場していない。しかし経営は産業化過程の主役であり、したがって産業化の研究は経営の研究を前提としている。経営学にたいする私の接近は、経営社会学ないし経営組織論を介してのむしろ間接的なものにとどまっている。しかし経済社会学をいう以上、それを個別主体に適用したものとしての経営社会学を考えたくなるのは当然であろう。これについて

は、本書とはべつに、「経営と社会」というかたちで問題設定をこころみる機会があるであろう。

最後に、私は、本書の基本的モチーフが私の「経済社会学」と史的唯物論との対決のかたちで表明されていることについて、一言しておく必要を感ずる。ある意味で「イデオロギー」意識が必要以上に過剰である現在、私は、このモチーフがあまりにイデオロギー的に解釈されないことを望む。すなわち、ここにいう「対決」とは、あくまでも基礎理論としての、つまりものの考え方の上での対決であるという、当然のことを私は確認しておきたいのである。経済社会学は、経済の社会的関連を問題にする。しかるに、問題をこのように提起すれば、史的唯物論をどう見るかを論じ、これと対決する必要が生ずるのは明らかであり、このことを避けるわけにはいかない。なぜなら、史的唯物論は一つのタイプの経済社会学であり、私の経済社会学はそれとはちがったものの考え方に立脚しているからである。たとえばそれは、ヴェーバー対マルクスという周知の対決が避けられないものであったのとおなじ種類の問題だといってもよかろう。社会科学基礎理論は、これもまた、現在、一つではない。したがって、基礎理論家たるものは、その発言において、常にポレミークの前に立つことを余儀なくされる。これは避けてはならぬ現実であって、これを避けようとしたとたん、基礎理論家たることの存在意義は消滅してしまうだろう。この問題を受けとめ、これを考えぬくのが、基礎理論家たるものの職能である。たいへん口幅ったいいいぐさと思われようが、このほんとうの意味での基礎理論家というのはこんにちきわめて少ない。

社会科学基礎理論は現在一つではないと私は思うが、いまの日本には、その一つでない諸理論がそれぞれに出揃って競合しあっているように思われる。これは日本のおかれた地理的位置と関係があり、また孤島でありながら世界の思想状況に敏感に反応する日本人の感受性とも関係があろう。基礎理論研究者たることを志すものにとって、このような状況は高度に刺激喚起的であるという意味で、恵まれた環境を与えてくれているということができよう。本書は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いわばそういう環境の一産物ともいえるであろう。

この本の準備にとりかかってから、もう六年になる。この間、書いたり破ったりのほとんど無限とも思われるようなくりかえしが続いた。ものにならないのではないかと思ったことも何度かあった。だがともかく私は、この六年のあいだほとんど一つのことを追求しつづけてきたといってよい。もちろんわれわれの職業的環境はいつも一つことに専念していることを許さないから、それが中断されることはたびたびあったけれども。また、この間に私は、一見ちがった主題と思われるかもしれないいくつかの論文を書いた。それらのうちには、理論的研究、学説史的研究、経験的モノグラフなど、いろいろの性質のものがふくまれている。しかし、それらはすべて、なんらかのかたちで本書の主題につながっていたと私は考えているし、またそういいきることができる。本書にふくまれている全四章はすべて、まったくの書きおろしであるが、ただ右のような事情から、その各部分のうちに、独立論文として発表したものの素材が織りこまれている場合がある。その場合には、その既発表論文を注記して参照をもとめてある。

本書がこのかたちでいちおうまとまるまでに、私ははかりしれないほど多くの方がたのおかげをこうむっている。以下にそのおもなものを記して、感謝のしるしとしたいと思う。

尾高邦雄教授は、本書の題名の名づけ親である。私は「社会変動の理論」を正面から名乗ることに躊躇を感じ、もっと特殊的な表題を考えていたが、尾高教授は一晩私の構想を聞いたあとで、黙ったまま、手もとの紙にマジック・インキでこの題名を大書して私に示された。これで私の決心がついた。そのほか、尾高教授は本書の全体を通読していろいろ助言をしてくださった。人生におけるすぐれた一人の師をもちえたことは、私の深いよろこびである。

本書のいくつかの部分については、私は私の所属する東京大学社会学研究室での研究会、高田保馬教授の主宰され

た大阪大学社会経済研究室での研究会、および高宮晋教授の主宰による組織学会の月例研究会で、それぞれ報告する機会をもった。それらの報告のうちにはひどく不十分なものもあって、必ずしもうまくいったものばかりではなかったが、討論は私にとっていろいろの意味で刺激的であった。また本書がほぼ完成に近づいた昨年の後半、私は本書の第三章および第四章の主要論点のあらすじを、この主題に関係のあるいくつかの重要文献の解説とあわせて、素人を対象として講義する機会をもった。経済同友会の研究部会で六回にわたってなされた連続講義がそれであって、この講義録を書きあらためた話し言葉の小型本が、同会の講義シリーズ中の一冊として本年五月に刊行された(『新しい産業社会――産業化と社会変動』鹿島研究所出版会)。この小型本は、経済同友会編と記されているけれども、それは講義の聞き手が同会の会員であったというだけのことである。この小型本にたいしては、坂本二郎氏(経済学)、萩原延寿氏(政治史)、八木誠一氏(哲学)から書簡のかたちで、大塚久雄教授(経済史)から口頭で、それぞれ私と異なる専門的知識を背景に、有益なコメントをいただいた。それらのコメントのうちには、産業化が必ずしも近代化をもたらさない歴史上の事例がたくさんある、社会変動の原動力として異種文明の接触という問題を重視すべきである、民主化という価値にたよりすぎて、変動にふくまれる攪乱・退歩・停滞の面についての洞察が不足である、官僚制化のマイナス面をどう考えるか、などの諸問題がふくまれており、どの一つをとっても私にとって決定的な意味をもった難問ばかりであった。これらの批判をここに記したのは、本書にたいして提起されるであろう諸論点の目録がすでにかなり出揃っていると思われたからであって、私としてはその一つ一つについて熟考しなければならないことを感じているけれども、にもかかわらず私は本書の議論のすじみちに変更を加えることをさしひかえた。時間的な制約から、中途半端な変更が論旨の一貫性をそこなうことをおそれたからである。私としては、専門を異にする多くの先輩および友人が私の考えに興味を寄せてくださったことに感謝するとともに、あまりに大きすぎる社会変動という問題につ

いて、私自身、完全な答を出したと思っているわけではないことをかさねてしるしておきたいと思う。

私が本書の筆をすこしずつすすめていたあいだ、日本社会学会の大会シンポジウムで、私の問題と直接に関係をもつ一連のテーマ（一九五九年「社会変動」、一九六〇年「日本の経営」、一九六一年「都市化」、一九六四―六五年関東部会「近代化」）がとりあげられた。それらのあるものについては私は報告者であり、他のものについては単なる聞き手であったが、それらから教えられるところは少なくなかった。また、昨年四月からの東大大学院における経済社会学を主題とする演習では、私は、数人の演習参加者とともに、本書におけるいくつかの基本的な論点にふれる問題を論ずる機会をもった。私は、社会学を主とし、経済学を副とするような勉強方法をこの演習でこころみてきた。このようなやり方には、学問分業の現状からいって当然に無理もあり弊害もあるけれども、もしそのような弊害を克服することができたら、そこから新しい刺激があらわれるだろうことを私は確信する。私よりも若い世代の研究者が、本書の終わったところから出発してその先を考えてくれることを私は願う。

以上のほか、私の研究生活をささえてくださっている多くの方たちに、私はこの機会にあらためてお礼を申しあげたい。私のこの研究は、私の所属する東京大学社会学研究室のスタッフの方たちをはじめとする、多くの諸先生・諸先輩・友人、ならびに父・理、妻・英子の精神的援助に負っている。

最後に、私は、本書の出版を熱心に推進してくださった岩波書店の古荘信臣氏と、種々御面倒をおかけした朝蜘圭一郎、竹内好春の両氏に、心からの感謝の言葉をささげたい。とくに、古荘氏の熱意がなければ、本書はこのかたちで出版されることはなかったであろう。また、本書ができあがるまでの過程でいろいろお世話になった社会思想社の八坂安守、河村忠雄両氏にも、この場所をかりてあつくお礼を申しあげたい。

昨年の一二月二九日、本書の完成を目前にして、私は母を失った。この本を母に見せてよろこびを分ちあうことができなかったことが、私の最大の心のこりである。兄弟をもたない私は、戦後の数年間、父のシベリア抑留に遭って、母と東京で苦難の生活をともにした。その後父と母は鹿児島から松本へと地方をあるき、私は東京にとどまったので、いま母に逝かれてみると戦後の苦難時代の母のすがたがいちばん心に焼きついている。生活条件がすこしよくなったとき、母はすでに病床にあった。この二、三年、母は手紙も書けない状態になったが、以前の母からの書簡をいま読みかえして、戦後多難であった生活のなかで童話を書き綴っていた母の心情的世界を私はしのんでいる。その生前にまにあうことができなかった本書を、私は母の霊にささげたい。

一九六五年七月　新所沢で雑木林と茶畑の武蔵野の変貌していく姿を眺めながら

富永健一

内容目次

序 …… 一

第一章　資本主義—社会主義の問題と社会変動の理論 …… 三

第一節　社会変動の理論はなぜ必要か
社会変動理論の貧困　この問題をめぐってのアンビヴァレンス　社会変動の理論と発展段階説　アンビヴァレンスの源泉——新しい挑戦

第二節　資本主義 対 社会主義の問題 …… 二一
「通念」への懐疑　資本主義と社会主義の「文化的不確定性」——シュンペーター　資本主義と社会主義の「構造的不確定性」——一つの思考実験　不確定要因は何か

第三節　資本主義の概念は社会の構造的基礎範疇たりうるか …… 四〇
上部構造—下部構造という説明仮説は確定的か　マルクスにおける資本主義の概念　ヴェーバーにおける資本主義の概念　ゾンバルトにおける資本主義の概念　生産者行動の体系としての資本主義

第四節　現代資本主義論と大衆社会論 …… 五二

資本主義論への新しい問題提起　現代資本主義――担い手としての組織と大衆　大衆社会――四つの共通論点　現代資本主義論と大衆社会論との相補関係

第二章　経済体系と社会体系……六七

第一節　社会科学における一九世紀的思考と現代……六九

社会科学の分化――統一的社会科学の解体　なぜ分化がおこったか　古典的社会科学はなぜ一つのものでありえたか　優越要因説・決定論的思考・および自然法則的思考

第二節　社会学的機能主義……七七

古典的思考様式からの訣別　すべてがすべてに相互依存する　新しい決定論の形態――ギュルヴィッチの場合　構造-機能的分析――パーソンズの場合　新しい総合の原理としての社会学的機能主義

第三節　経済と社会との関係についての古典的諸学説……八七

経済と社会との構造的な関連　類型一――経済と社会をそれぞれ別個の閉じた体系とみなす見解　需要と供給――新古典派における経済と社会　パレートの場合　ヴィーゼの場合　ケインズ理論における経済と社会　類型二――経済と社会との独立性をみとめない見解　「生産関係」と「社会関係」――マルクスにおける経済と社会　歴史主義的経済観と社会学主義的経済観――シュモラーとデュルケム　歴史学　対　社会学――ゾンバルト　モーニエの経済社会学　ゾンバルト、モーニエ、マルクス――比較検討

第四節　経済体系と社会体系……一二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com